幼稚園でおはなしをするとき

――渡辺桂子先生の組で――

淡路町幼稚園に渡辺桂子先生をお訪ねして、お話をつくる目的や、どんなふうにしてお話をつくるかをうかがいました。

◇お話はどんな目的でなさいますか。

お話は先ず子どもを楽しませるためにします。それからちょっと大げさかもしれませんが、人間をつくるためにします。子どもが生まれて初めて出会った「話」、それは、たいへん大事だと思います。非常に心にひびき、一生を左右しかねないと思うのです。良い話は子どもの心にぴんとくるものがあり、一生胸に刻まれていて、豊かな人生を送ることができるのではないでしょうか。

◇初めて子どもにお話をする時、どんなことに注意されますか。

最初に子どもに与える話は、あまり教訓くさくないものにしたいと思います。最初はあまり教えたいと思いません。おもしろい、楽しい、ということ、子どものエネルギーを満足させたいということを考えます。子どもはおもしろいとすぐそれに反応し、どんどんキャッチしてくれます。

◇どんなふうにしてお話をつくられますか。

わたしは子どもと一しょに話をつくってゆきます。「これはみんながつくったお話なのよ」と子どもにぶつけてゆきます。題名も子どもが考えてくれます。子どもたちは「ぼくたちがつくったお話だ」「これはあの時つくったんだ」「これはあの時だ」と自分たちの中から生まれた話、自分たちが参加した話だという意識をもって楽しみにしてきいてくれます。かなり意図的につくるのですが……。

子どもたちに「お話をつくる」という意識をもたせて話をつくります。時々子どもたちもお話をつくってもって来てくれます。

◇お話をつくられた例を一つ二つ聞かせてください。

（例一）

子どもたちが自由に遊んでいます。わたしはそこへ行って、そこ

らに遊んでいる子の名前を、「太郎ちゃんがいました。次郎ちゃんがいました。三郎ちゃんがいました。〜ちゃんがいました」と呼びます。（子どもは呼ばれること自体が楽しいのです。子どもたちが耳を傾けているところでわたしが話します。）

だんだん遊ぶことがなくなってあきてきました。遊ぶことがないから魔法使が来ておもしろいことを教えてくれるといいなあと思いました。じゃ魔法使よんじゃおうか？（とききますと子どもたちは「それがいい、それがいい」といいましたので）「魔法使さーん、魔法使さーん」とみんなでよびました。魔法使さんが来ました。

「あのねぼくたち退屈したから何かになりたい」といいました。

（ここで子どもたちはそれぞれ自分のなりたいものを言い出します。）「ぼくはちょうちょ」「じゃちょうちょにしてあげましょう」「ぼくは学校になりたい」（わあーっとみんなが驚きます。）

「じゃ学校にしてあげよう」「わたしは赤ちゃん」「ねこ」「汽車」。みんな、ちょうちょや、学校や赤ちゃんや、ねこや、汽車になって散歩しました。学校まで歩いて行きました。（またみんなわあーっと笑います。学校になった子は得意そうにおもしろいかっこうで歩きます。それぞれ赤ちゃん、ちょうちょのまねをして歩きます。歩くことだけでも子どもは楽しいのです。）

散歩してから「今のお話何という題にしましょうか」ときくと「子どもと魔法使」などと題をつけてくれます。

（例二）

入園後間もない頃、幼稚園へ来たら、門から外へ出てはいけないということを教えるのに、「外へ出てはいけません」と言わないでこんな話をしました。たまたまちょうちょがへやへ入って来ることがあります。この辺ではちょうちょはたいへんめずらしいので、子どもたちは大喜びをします。それで次のように話し出します。「ちょうちょがとんで来ました。ちょうちょはへやの中をとんでいます。子どもたちがちょうちょを追いかけました。『ちょうちょは窓からお庭へ出てしまいました』（と子どもがいいます）。子どもたちもお庭まで追いかけて行きました。ちょうちょはスベリ台にとまりました。それからブランコにとまりました。子どもたちもスベリ台やブランコへ追いかけました。それからちょうちょはご門から外へとんでいってしまいました。だけど子どもたちは追いかけて行きませんでした。」

（例三）

幼児には空想と現実の区別があまりないので、お話をつくるのにはたいへん便利です。「〜したい」と思うと、すぐ実際にそれをしたような状態になる子がいましたので、その状態を表現して「ほわんほわんのたくちゃん」というお話をつくって話しました。子どもたちはそれからよく遊びの中で「ほわんほわん」とか「ぼくほわんほわんだよ」などといっていました。

◇子どもたちがよく先生の意図にのってくれるのですね。机の上だけでお話をつくられることはないのですか。

昨年はたいへん話のうまい、頭のいい子がクラスにいたため、皆が刺激されて、「お話をつくりたい」というわたしの意図にどんどんのってくれて、いろいろなお話が生まれてゆかいでした。ある時締切の原稿に追われ、子どもと一しょにつくる余裕がなく、机の上でお話をつくって来ました。「先生お話つくったのよ」と申しますと「先生きいてあげるよ」と子どもたちがいいます。それで原稿用紙のままよみました。おもしろい時は、すぐおもしろいと言ってくれますし、つまらない時は反応がないのですぐわかります。

◇子どもがお話をつくった例を一つきかせてください。

ある時音楽会をしました。そのために長い間練習をしたのですが、本番で失敗をしてしまいました。その時ある男児が「ぼくお話つくったよ」とやって来て次のような話をしてくれました。

「子どもたちはいっしょうけんめい音楽会の練習をしました。だけど本当の時失敗をしてしまいました。先生はカンカンにおこって子どもたちを箱の中へつめてしまいました。子どもたちは箱の中でいっしょうけんめい音楽会をしました。それはたいへんよくできました。先生は箱のところへ耳をあててききました。それはオルゴールのようにいい音がしました。先生はたいへんよろこんで何回も何回も箱のところへ耳をやってきいていました。箱の中からはいつまでも、いつまでもオルゴールのようないい音がしていました。」

◇おとなにはとても表現できないかわいい話ですね。

ええ、先生がよほどこわかったとみえ、箱の中へつめられたと表現しています。子どもはこわい時箱の中へつめられたとか、暗いところへ入れられたと表現します。おかあさんのおなかにいた状態へ帰るのが一番安心な状態なのでしょうね。」

渡辺先生の今年のクラスは二二名で、内九名が三年保育から上がって来た四才児（内七人男）、七名が今年入った四才児、六名が今年入った三才児と混合組で、三年保育から上がった四才児に男児が多いこともあってたいへん乱暴でボス的存在だとのことです。クラスとしてたいへんまとまりにくく、まだ今年になって一度もお話をきかせていません。

五月三十一日（木）、子どもに初めてお話をきかせる場面を見学させていただきました。この日は「はしか」のために十二人がお休みで、十人（男六、女四、内三才児男一、女二）の子どもでした。

◇一〇時五〇分

今まで自由あそびをしていた子どもたちは一列にいすにすわりました。

先生「たくみちゃんがスキップしたいっていってましたから、みんなでスキップしましょう」。「ぼくもしたい」「わたしもスキップし

たい」とみながてんでにいいます。「あそう〇〇ちゃんも、〇〇ちゃんも、したいの、じゃみんなで二回ずつスキップしましょう」と右端から順に楽しそうに、精一杯スキップをしてまわりました。二人の三才児はただ走ってまわりました。それからお手洗いに行き、水を飲みたい人が飲みました。次に二人の子が先生になって、「むすんで開いて」と「だしてひっこめて」をしました。

◇一一時

先生「おいすをもって明かるい方へ静かに行きましょう。」

男児「白ぐみさんみたいにでしょう。」（白組は大きい組らしい）

先生「そう白組さんみたいに行きましょう。」皆いすをもち、にこにこしながらそっとあるく。「先生もいすをもって来ようかな。先生のところへすわりましょう。」

男児「紙芝居でしょう。」

「さあ、何でしょう。先生にお顔をよーくみせて、先生まだみんなのお顔よくみていなかったの。あのね今日おうちでねている人が大勢いるでしょ。その人たちにお使いしてくれる？　お使いに行く時何といったらいいかしら。」

男児「郵便ですよ」「あ、〇〇ちゃんは郵便ですよというんですって。この前お手紙持っていっていただいたわね。今日はお誕生日のお菓子ですから。」（午後から誕生会がある）「お菓子の配達ですよ」「お誕生日のお菓子ですよ」「幼稚園のお誕生日だから、お菓子を持って来ましたよ」と各々答え出す。

先生「そう、じゃみんなに好きなようにいってもらいましょう。だまっておいてくると、あれ、ねずみさんがもって来たのかなっておかあさんが思っちゃうかもしれないわね。」

「今日はね、先生お話がしたいの」とはなしかけました。

「みんなは紙芝居も、絵本もみましたけど、何もなくてお話だけきくのはしなかったわね。お話どこで聞くの。」みんな「ここ、ここ」といすをたたきます。（場所のことを指している）

先生「ああこの場所でね、目できくかしら」「耳」「目は」「みるの」「そうみるのね。先生の方をみるといいわ。先生の方をみて、静かにきける人いるかしら」。二～三人の子が手をあげます。「先生聞けると思うわ、みんなきけると思う」。みんな元気よく手をあげます。

「ある日コオロギが散歩をしていました。（たいへん好気心をもってきいているようにみえる）散歩をしていると、ヒヨコにあいました。そこでコオロギがあいさつをしました。

『あらヒヨコさんこんにちは』

けれど、ヒヨコはごきんがわるくって、「なんだ　ちびすけ　おまえなんか　つかまえて　つっついちゃうぞ！」とコオロギに　むかってきました。（ここまで静かに聞いていた子どもたちは、くっくっと声をたてて笑い出す）

『いやーん、ごめんなさい。たすけてよ』

『そんなら、ぼくのけらいになるんだぞ、そしたら助けてやるよ』

『ええいいわよ、助けてくれるんなら……』

そこでコオロギはヒヨコのけらいになって二人で散歩しました。すると今度はネコにあいました。そこでヒヨコはネコにあいさつしました。

『やあ、ネコさんこんにちは』

けれどもネコさんもごきげんがわるくって『なんだ　ちびすけ、（ここで子どもたちがまた声をたてて笑う）おまえなんかつかまえて、ひっかいちゃうぞ！』とヒヨコにむかってきました。

『やだーい、ごめんよ、助けて』

『けらいになるなら助けてやってもいいよ』

『うん、いいよ、助けてくれるんなら』

そこでヒヨコはネコのけらいになりました。ネコとヒヨコとコオロギが一列にならんで散歩をしました。

今度はイヌにあいました。（ここでイヌ？　と男児の一人が声を出す）ネコが

『やあ、イヌさん今日は』とあいさつしますと、イヌもごきげんがわるくって

『なんだちびすけ、おまえなんかつかまえて、かみついちゃうぞ！』（また子どもたち笑う）とネコにむかってきました。

『やだーい、ごめんよ。助けて』

『そんならぼくのけらいになるんだぞ』

『うん、いいよ。助けてくれるなら……』

そこでネコはいヌのけらいになりました。

イヌとネコとヒヨコとコオロギが一列にならんで散歩していると、今度はタローちゃんにあいました。

『やあタローちゃん今日は』イヌがあいさつをすると、タローちゃんはニコニコして

『やあ今日は、みんなならんでどこへ行くの？　ぼくもなかまに入れておくれ』

『けらいになるなら入れてあげるよ』とイヌがいいました。

『けらいになるのはいや！』とタローちゃんはいいました。

するとコオロギも『けらいなんていや』

ヒヨコもネコも『けらいなんていや』といい出しました。

イヌはこまってしまいました。タローちゃんは

『そんならみんなお友だちになればいいんだよ』といいました。

するとコオロギは『わたしタローちゃんのお友だちになるわ』

ヒヨコもネコも『ぼくもタローちゃんのお友だちになるよ』といいました。

イヌはこまったけど『ぼくもなるよ』

『ワーイみんな仲良しのお友だち』タローちゃんがそういって歩き出すと、

『タッタカタッタカワンワンワン』（先生が大手をふって歩きながら話す。子どもたちはうれしそうにきいている。何でしょうというとイヌと声をそろえて答える）

『タッタカタッタカニャゴニャゴニャゴ』（ネコーと答える）

『タッタカタッタカピヨピヨピヨ』(ピヨコーと答える)
『タッタカタッタカコーロコロ』(コオロギと答える)。」
たいへんおもしろそうに聞いていました。特に「なんだいちびすけ」のところは声をたてて笑い「タッタカタッタカ」とリズミカルな部分、動物のなき声の部分も喜びました。
「またおいすを持って、もとの場所へ行きましょう。」子どもたちはもとの場所へすわりました。先生が
「一番はじめ何が出て来た?」ときかれると「コオロギ」と元気よく男児が答えます。
「はい、かずおちゃんよく覚えていたわね、ぼくコオロギになって、まだコオロギになりたい人いる?」
かずおちゃんがコオロギになりうれしそうに散歩します。(オルガンに合わせて)
「コオロギさんがお散歩していたの、そこへ何が来たの」
「ヒヨコ」と元気よく何人かが答えます。
「ヒヨコになりたい人?」 四〜五人手をあげ、選ばれた二人が散歩します。とてもうれしそうです。
「ヒヨコさんとコオロギさんが出合いますよ、そしたらどうするの?」ニコニコ笑って恥ずかしそうにしていると「こんにちわっていうんでしょう」という先生の声に皆頭を下げます。
ヒヨコになった子はニコニコしながら「お前なんかつかまえちゃうぞ」と言いながら、コオロギの男児のかたをつかみます。
先生の指導で「けらいになるんなら助けてやるよ」といいまた散歩します。
ネコの希望者がさっと立って行き、あいさつがすんでから「お前なんか食べちゃうぞ」とヒヨコをつかまえます。
「イヌにだれかなってよ。」
さっと一人の男児が出て行き、歩いて、あいさつがすんでから「お前なんか食べちゃうぞ」「食べないでください」といい出すので先生が「食べないでくださいだって、そしたら」「その代りけらいになりなさい。」
子どもたちは楽しそう、残ってみている女児たちも歓声をあげて喜んでいます。「タローちゃんになりたい人?」
残っている四人の女児が一斉に手をあげるので
「女の人全部? じゃみんな女だから花子ちゃんになってもらいましょう。」
四人楽しそうに手をつないで男児と反対方向へ散歩をします。
先生が「こんにちわ 入れて」というと「入れて」と女児が声をそろえて。「やだよ」と男児。
「あら、そういったんだっけ」「けらいになるなら」「けらいや!」
「ぼくもけらいや」と一人の男児が後を向きます。
先生が「おともだちになれぼいいよ。ワーイ、ワーイお友だちって歩くのでしょう。」
女児は手をつないでオルガンにあわせて歩き、男児は各々にドン

ドンと歩き出します。

「タッタカタッタカワーンワーン」と先生がオルガンをやめて言われると、うれしそうに歩き、先生の指導でワーンワーン、ニャオニャオ、ピョピョ、コーロコーロと順に二度いってすわります。

＊先生がこのお話の絵本（こどものとも「たろうのともだち」一九六二年一月一日発行、渡辺桂子作、堀内誠一絵）の包みをもって来ると子どもたちは「わあ、何」「洋服かな」と目を輝かします。先生は包みをときながら、「あのね、これから先生のだいじなご本をみんなに貸してあげます。今のお話がのっていますから、どこでも好きなところで読んで、読んだら返してください」といって一冊ずつ配ります。

もらった子は「あ、ヒヨコがいた」「トラみたいだ」（ネコの絵をみて）などといいながら順にみ始めます。「ぼくスベリ台の上」「わたしあそこ」（ウマ）とそれぞれの場所へ二〜三人ずつかたまってみています。

早い子は一通りめくると「先生みた」と先生に返し、遅い子は五分ぐらいじっとみています。一人の男児が

「先生『太郎とヒヨコ』という題なの」と本を返しながらききます。

「そうかもしれないわね」と先生は笑いながら受けとります。三才の女児がウマの上で「ネコがねむっていました。王様になるなら入れてあげるよといいました」と大きな声で読んでいます。先生に本を返した子たちは、それぞれ、外、スベリ台、他の絵本と自由あそびに移りました。（一一時三〇分）

今日のお話の目的は「三年保育から上がってきた男児たちが乱暴で、みながそれにかきまわされているので、何とかしてみなが仲良しの友だちになれるように」という点にあったとのことです。

始めてお話をきいたこの十人の子どもたちは、散歩して出合った動物の順番も、名前もみな覚えていましたし、それぞれなりたい動物にすすんでなって楽しく歩いていた様子から、とても楽しくきくことができたと思います。また「紙芝居かな」と期待していた子どもたちはお話をききたいという心の準備が充分できていましたし、子どもたちの心にぴったりのお話だったように思えます。

お話の前の十分ばかりの前面から想像されることは、「ぼくスキップしたい」「わたしもしたい」と、先生と子どもの意図が非常によく一致し、先生の意図にのりながら、子どもたちは自発的に、自分の希望が達せられる喜びを味わっており、先生と子どもの人間関係がたいへん良くいっているとの印象を受けました。

「ぼくお菓子の配達ですよって言う」というように、子どもは自由に、喜んで発言しています。子どもたちは、たいへんのびのびとしているように思えました。

「ぼくや、わたしの大好きな先生のお話」を楽しみにきいたということが感じられました。

（I）